

# 実践的研究事業実施地区を対象とした アンケート調査(第1回)の結果

## 調査目的

学校におけるインクルージョンに関する取組における今後の検討の基礎資料とするため。

## 調査対象・回答状況

地区	区分	対象種別	対象者数	回答者数	回答率
豊島区	研究校	教員	22名 [4名]	21名 [4名]	95% <100%>
		保護者(5・6年生)	122名 [7名]	34名 [0名]	28% <0%>
		児童・生徒(5・6年生)	122名 [7名]	53名 [0名]	43% <0%>
	非研究校	教員	161名 [31名]	114名 [25名]	71% <81%>
		保護者(5・6年生)	934名 [45名]	361名 [20名]	39% <44%>
		児童・生徒(5・6年生)	934名 [45名]	649名 [14名]	69% <31%>
日野市	研究校	教員	62名 [19名]	51名 [13名]	82% <68%>
		保護者(5・6年生)	350名 [15名]	82名 [3名]	23% <20%>
		児童・生徒(5・6年生)	350名 [15名]	188名 [5名]	54% <33%>
	非研究校	教員	235名 [65名]	61名 [24名]	26% <37%>
		保護者(5・6年生)	1,353名 [62名]	381名 [12名]	28% <19%>
		児童・生徒(5・6年生)	1,353名 [62名]	400名 [22名]	30% <35%>
合計			5,998名 [377名]	2,395名 [142名]	40% <38%>

※[ ]:特別支援学級担当教員又は特別支援学級在籍者数\* (内数)

< >:特別支援学級担当教員又は特別支援学級在籍者\*における回答率

\*特別支援教室担当教員は特別支援学級担当に含む。通常の学級に在籍して、特別支援教室の指導も受けている児童・生徒は通常の学級に含む。

## 調査期間

調査実施期間:令和4年7月12日から9月22日まで  
(インターネットを用いたWEBアンケート方式による回答)

## 回答校

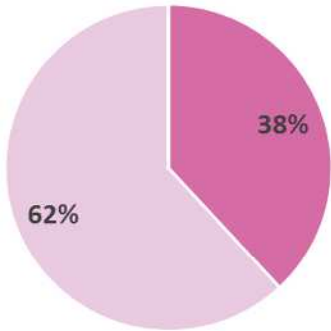
- 豊島区研究校:要小学校
- 豊島区非研究校:西巣鴨小学校、朋有小学校、池袋第三小学校、長崎小学校、巣鴨北中学校、西巣鴨中学校、西池袋中学校
- 日野市研究校:夢が丘小学校、七生緑小学校、日野第三中学校
- 日野市非研究校:日野第一小学校、日野第三小学校、平山小学校、日野第八小学校、滝合小学校、日野第二中学校、日野第四中学校、平山中学校

# 教員向け調査結果の概要

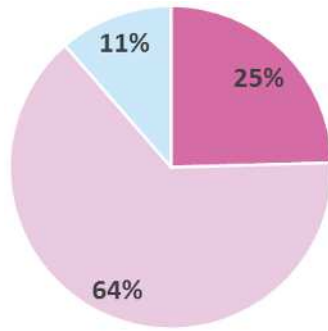
## 1 区市で進めているインクルーシブな教育について理解している

### 豊島区

研究校(n:21)

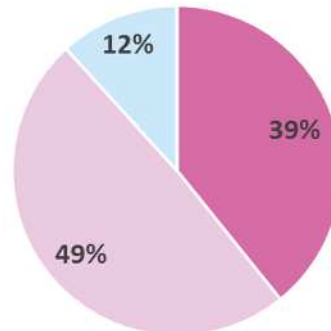


非研究校(n:114)

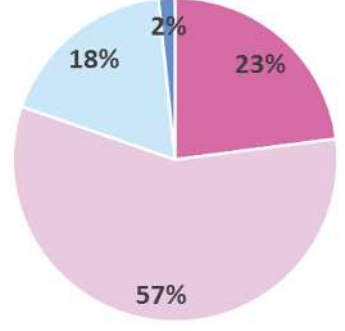


### 日野市

研究校(n:51)



非研究校(n:61)



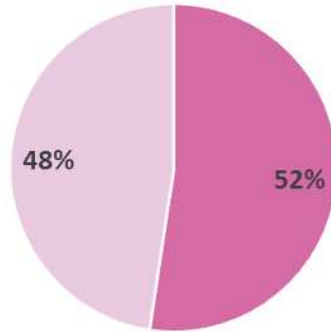
凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない

- 区市で進めているインクルーシブな教育に関する教員の理解度については、両区市ともに研究校の方が高い傾向にあった。

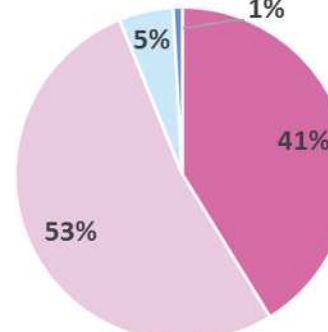
## 2 特別支援教室の仕組みについて理解している

### 豊島区

研究校(n:21)

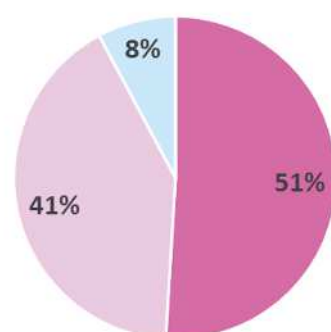


非研究校(n:114)

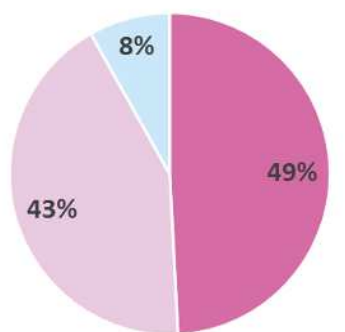


### 日野市

研究校(n:51)



非研究校(n:61)



凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない

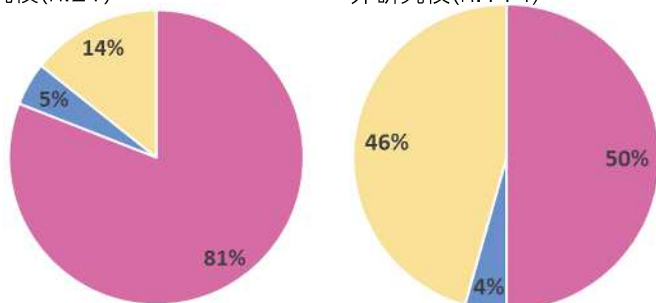
- 特別支援教室の仕組みに関する理解については、研究校と非研究校との間で、大きな差は見られなかった。

同一校内に通常の学級(以下、本章においては「通常級」という。)と特別支援学級(以下、本章においては「支援級」という。)が設置されている豊島区内の学校において、交流及び共同学習の実施に当たっての計画の作成状況や教員間の事前準備について、アンケート結果を基に、研究校と非研究校の比較を行った。

#### (1) 所属している学校は、交流及び共同学習に係る計画を作成している

研究校(n:21)

非研究校(n:114)



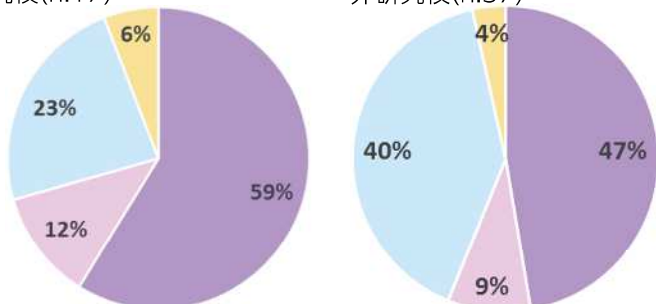
凡例: ■ している ■ していない ■ わからない

- 所属している学校において交流及び共同学習に係る計画を作成しているか訊ねたところ、研究校では8割が「作成している」と回答したのに対し、非研究校においては半数に留まり、また、作成しているか「わからない」と回答した教員も半数近くであった。

#### (2) 交流及び共同学習に係る計画の作成者

研究校(n:17)

非研究校(n:57)



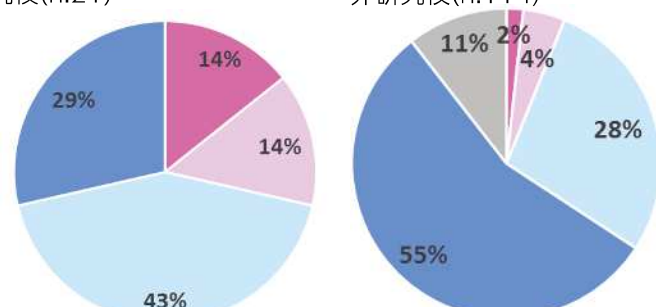
凡例: ■ 通常級と支援級の教員 ■ 通常級の教員 ■ 支援級の教員 ■ 校内部会・委員会

- 「計画を作成している」と回答した者に計画の作成者を訊ねたところ、研究校においては通常級と支援級の教員との協働や校内部会・委員会での作成が合わせて約7割であるのに対し、非研究校では約半数となり、支援級の教員のみで作成している割合も4割程度と、研究校よりも多い傾向にあった。

#### (3) 交流及び共同学習を実施する際、通常級又は支援級の担任との事前準備に要する時間

研究校(n:21)

非研究校(n:114)



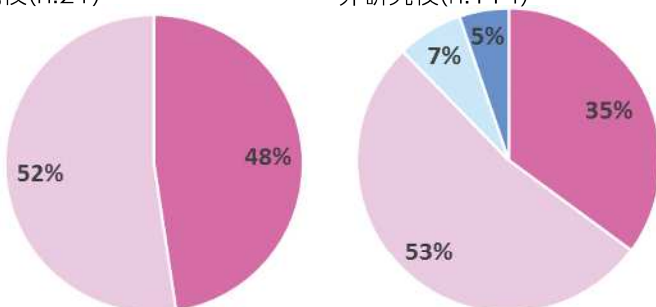
凡例: ■ 3時間以上 ■ 2時間～3時間未満 ■ 1時間～2時間未満 ■ 1時間未満 ■ していない

- 交流及び共同学習の事前準備に要する時間について訊ねたところ、研究校の方が準備時間が長い傾向にあった。

#### (4) 交流及び共同学習を実施する際、事前に児童・生徒の情報共有が通常級と支援級の教員間で相互に行われている

研究校(n:21)

非研究校(n:114)



凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない

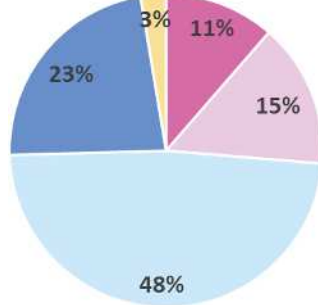
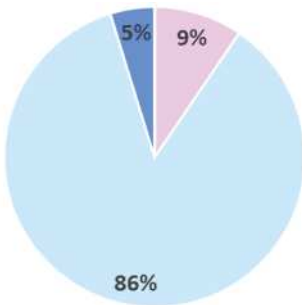
- 交流及び共同学習を実施する際、事前に児童・生徒の情報共有を通常級と支援級の教員間で相互に行っているか訊ねたところ、研究校においては全員が肯定的な回答であるのに対し、非研究校においては一部の教員で「そう思わない」等の回答があった。

同一校内に通常級と支援級が設置されている豊島区内の学校における、交流及び共同学習の実施状況について、アンケート結果を基に、研究校と非研究校等の比較を行った。

(1) 共同学習の実施回数

研究校(n:21)

非研究校(n:114)



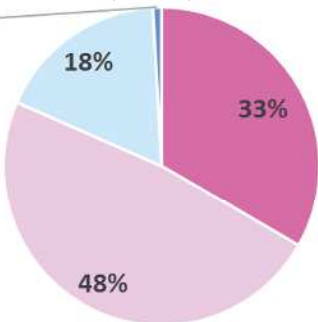
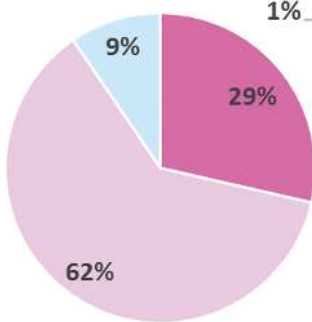
■ 共同学習の実施回数については、非研究校においては実施していないと回答した教員の割合が高くなっている。

凡例: 週1回程度 月1回程度 年数回程度 実施していない その他

(2) 学級や学年全体の児童・生徒に対して、特別支援教育の理解に関する普及・啓発を行っている

研究校(n:21)

非研究校(n:114)



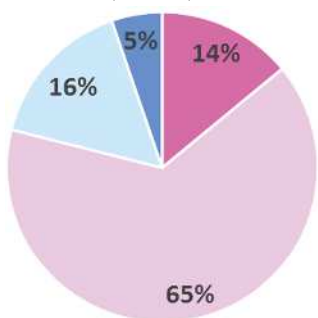
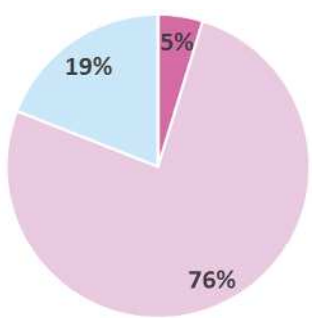
■ 学級や学年全体の児童・生徒に対する特別支援教育の理解に関する普及・啓発については、研究校の方が肯定的な回答をした教員の割合が高くなっている。

凡例: そう思う どちらかといえばそう思う どちらかといえばそう思わない そう思わない

(3) 共同学習を実施する教科や単元等の目標を達成することができた

研究校(n:21)

非研究校(n:114)

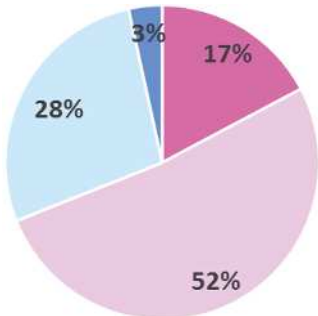
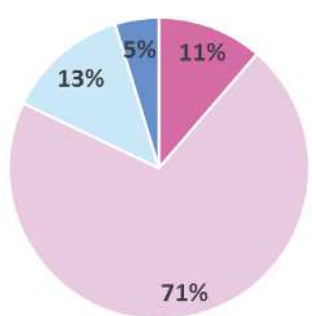


■ 共同学習を実施する教科や単元等の目標を達成することができたか訊ねたところ、研究校と非研究校の間で、大きな差は見られなかった。

凡例: そう思う どちらかといえばそう思う どちらかといえばそう思わない そう思わない

通常級(n:106)

支援級(n:29)



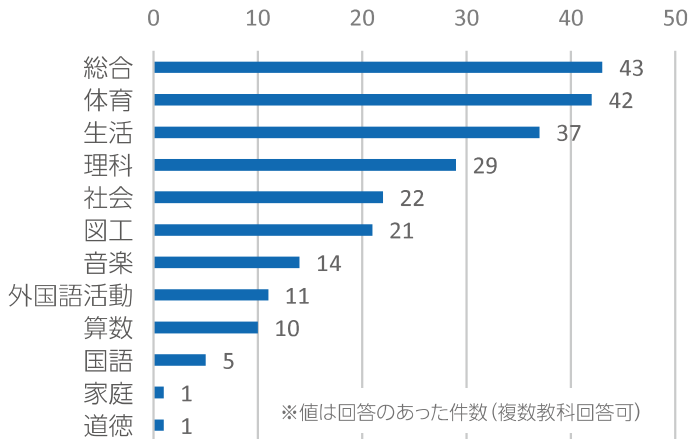
■ 一方、同じ質問について、通常級と支援級(いずれも研究校・非研究校の合算)の回答を比較すると、支援級の教員においては、「学習目標を達成できていない」に分類される回答の割合が、通常級の教員のよりも高い傾向にあった。

凡例: そう思う どちらかといえばそう思う どちらかといえばそう思わない そう思わない

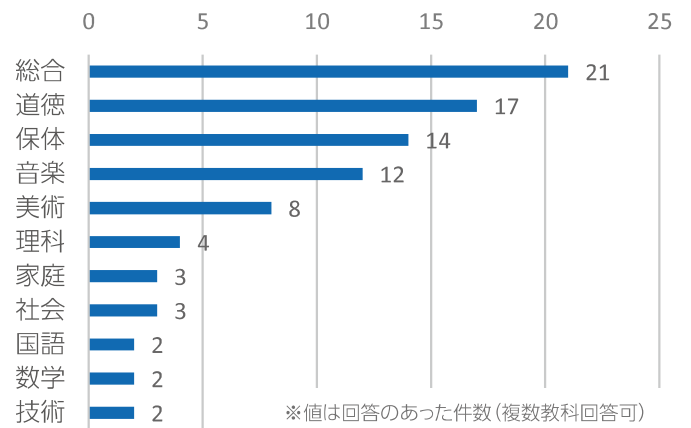
## 5 交流及び共同学習を取り入れやすいと感じる教科や活動について

豊島区・日野市

### 小学校



### 中学校



\*「道徳」の回答件数が多いことについては、ある自閉症・情緒障害特別支援学級設置校において、道徳での共同学習が定期的実施されていることに起因する。

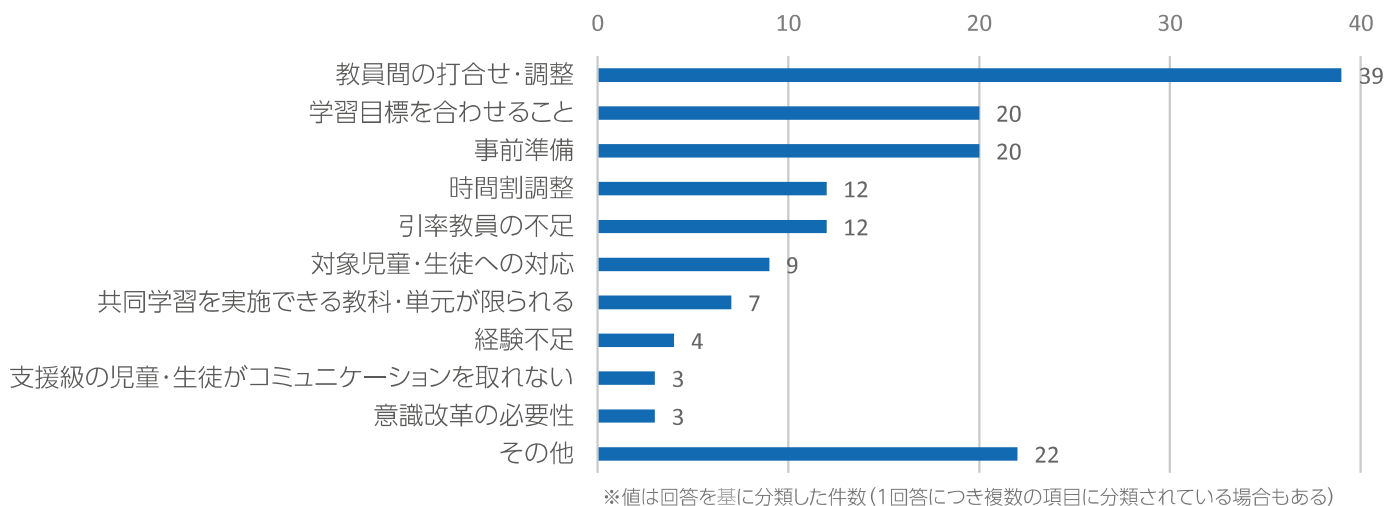
教科	具体的な活動等
社会	「校外学習」「地域探検」「産業」
算数	「かたちづくり」
理科	「観察」「磁石・電気の働きを生かしたおもちゃづくり」「実験」
生活	「生き物」「遊び名人」
音楽	「楽器」「合奏」
体育	「体づくり」「表現」「チーム競技」「水泳」

教科	具体的な活動等
数学	「正負の数」
理科	「実験」「生物育成」「動植物の分類」
音楽	「楽器」「合奏」
美術	「鑑賞」
技術	「生物育成」

■ 交流及び共同学習を取り入れやすい教科として回答があったのは上図のとおりであり、特に取り入れやすい活動として回答があったものは表記の通りである。

## 6 交流及び共同学習の実施に当たり、負担に感じていることや課題と感じていること

豊島区・日野市



- 通常級と特別支援学校や支援級の教員間における事前の打合せや調整をするための時間の確保が難しいなどの意見が最も多かった。
- 次いで、学力の差の開きなどから、通常級と特別支援学校や支援級の児童・生徒のそれぞれの目標設定が難しいなどの意見が多かった。
- 事前準備にかかる時間的余裕がないなどの意見も、同数であった。
- その他、時間割の調整、引率教員の不足、対象児童・生徒の対応への難しさ、共同学習を実施できる教科・単元が限られるなどの意見があった。

有効回答82件のうち、主な意見としては以下のものがあった。

- 26件が、「通常級の教員との情報共有」や「事前の共通理解」など、教員間の打合せ・調整に関する内容であった。
- 次いで「他の学校の実践は参考になった」など事例の共有に関する内容と、「各学年の時間割作成の際に支援級の時間割と事前に調整する」など時間割の事前調整に関する事項が、それぞれ5件であった。
- その他、「指導方法の工夫」に関する内容が3件、「ICTの活用」が2件であった。

**その他の回答** ※課題解決に役立ったこと以外の一般的な感想を含む。

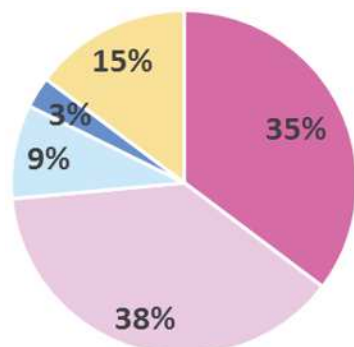
- 社会に出ていく上で、必要な体験だと感じるので、通常級との行き来が当たり前になるようにしていきたい。
- 直接交流が望ましいとも思うが、オンラインでも交流できたのは児童にとっても、世界が広がったように見えた。
- 普段から、通常の生活においても交流ややり取りがあると計画しやすい。
- 必要性の意義はあるが、他の業務の負担を軽減しなければ、進まないのではないかと危惧している。
- 教務に、通常級と支援級の各学年との交流相談日を設定してもらえたことで、相談しやすくなった。
- 職員室が異なるために、情報を得るための移動が必要になるのが負担である。
- 外部講師を招聘しての校内研修を繰り返しもちたいが、時間的に厳しい。

# 保護者向け調査結果の概要

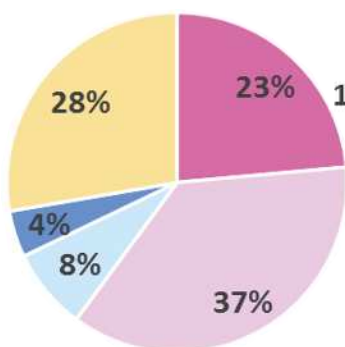
## 1 学校は、交流及び共同学習や異学年交流等を通して、人間関係を築く力を育てる教育を進めている

### 豊島区

研究校(n:34)

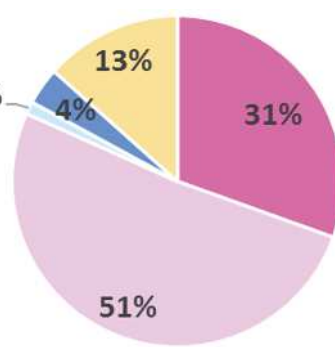


非研究校(n:361)

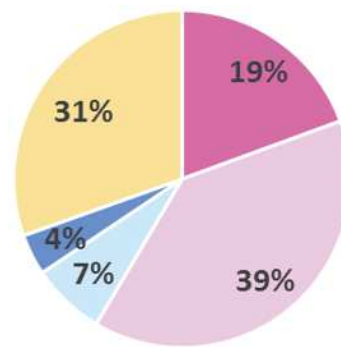


### 日野市

研究校(n:82)



非研究校(n:381)



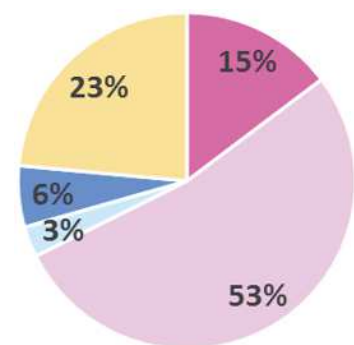
凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない ■ わからない

- 両区市ともに、研究校の保護者の方が、「交流及び共同学習や異学年交流等を通して、人間関係を築く力を育てる教育を進めている」ことを肯定的に感じている割合が高く、「わからない」と回答する割合も低い傾向にある。

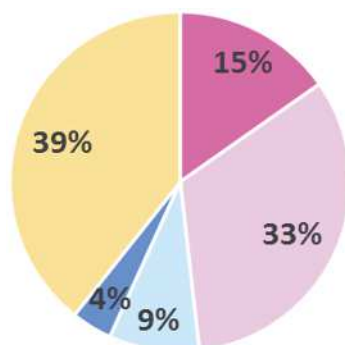
## 2 学校において行われている交流及び共同学習の取組内容について知っている

### 豊島区

研究校(n:34)

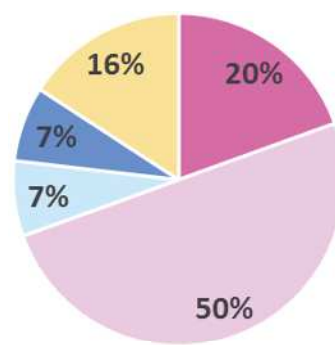


非研究校(n:361)

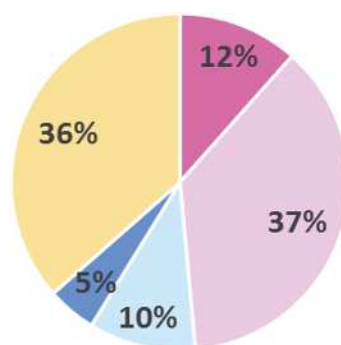


### 日野市

研究校(n:82)



非研究校(n:381)



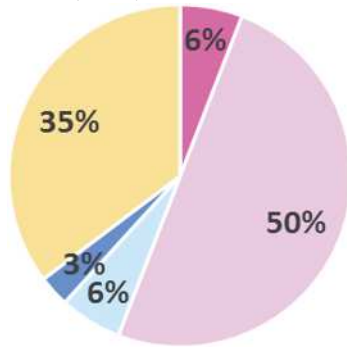
凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない ■ わからない

- 両区市ともに、研究校の保護者の方が「学校において行われている交流及び共同学習の取組内容について知っている」割合が高く、非研究校の保護者においては、交流及び共同学習の取組内容について「わからない」と回答する割合が高い傾向にある。

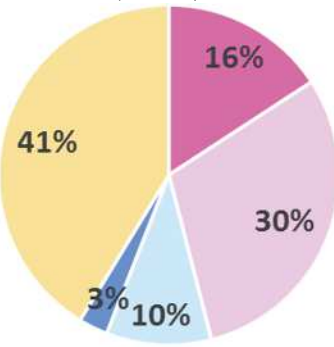
### 3 学校において行われている交流及び共同学習の取組内容について、満足している

#### 豊島区

研究校(n:34)

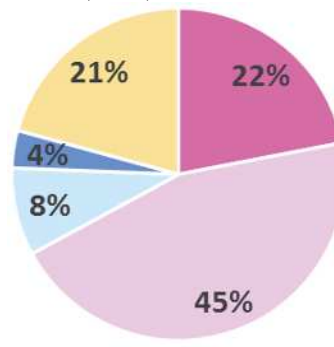


非研究校(n:361)

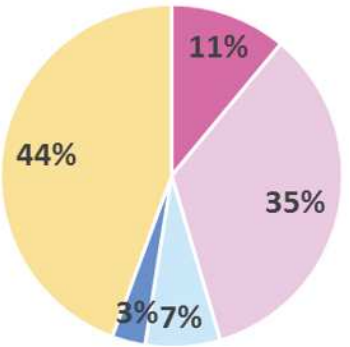


#### 日野市

研究校(n:82)



非研究校(n:381)

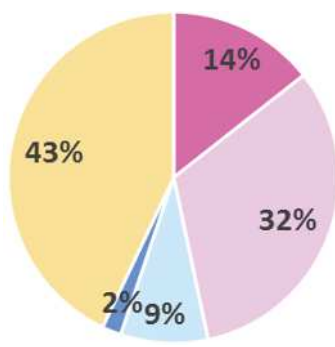


凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない ■ わからない

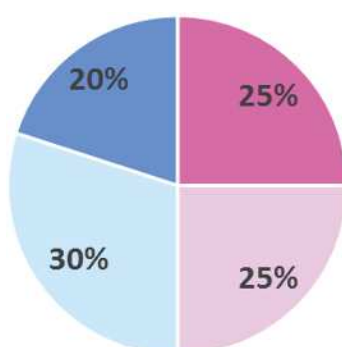
- 研究校と非研究校の保護者の回答を比較すると、研究校において肯定的な回答をした比率が高い。
- 非研究校において、交流及び共同学習の取組内容について「わからない」と回答した比率が高い。

#### 豊島区

通常級(n:375)

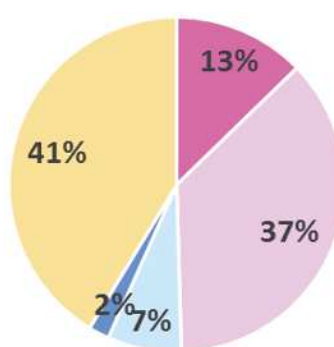


支援級(n:20)

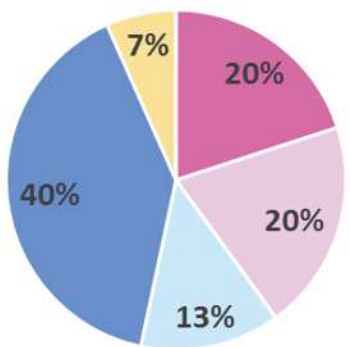


#### 日野市

通常級(n:448)



支援級(n:15)



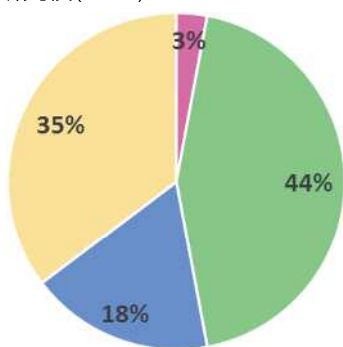
凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない ■ わからない

- 同じ質問について、通常級と支援級（いずれも研究校・非研究校の合算）の回答を比較すると、通常級に比べて支援級の保護者においては、交流及び共同学習の取組内容について、満足していないと回答している比率が高い傾向にある。

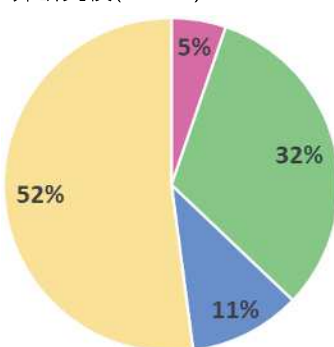
### 4 学校において行われている交流及び共同学習の実施回数について

#### 豊島区

研究校(n:34)

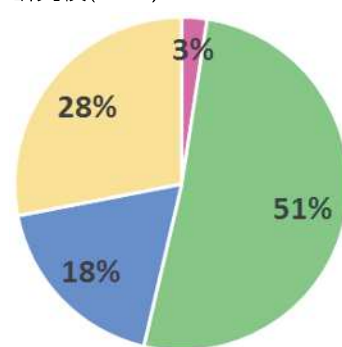


非研究校(n:361)

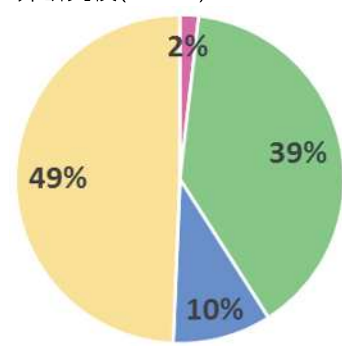


#### 日野市

研究校(n:82)



非研究校(n:381)



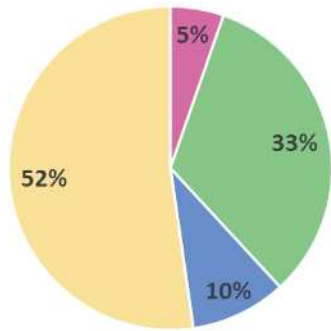
凡例: ■ 多いと思う ■ 適当である ■ 少ないと思う ■ わからない

- 研究校と非研究校を比較すると、非研究校において「わからない」と回答している比率が高い。
- 交流及び共同学習の実施回数が「多い」と感じている割合は、全体的に低い傾向にある。

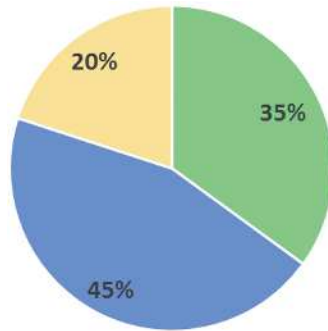


## 豊島区

通常級(n:375)

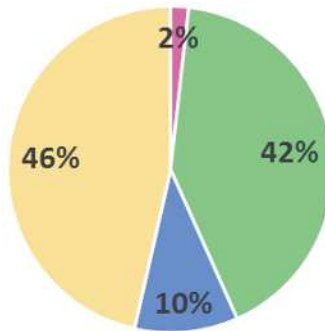


支援級(n:20)

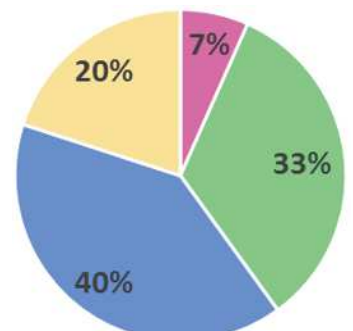


## 日野市

通常級(n:448)



支援級(n:15)



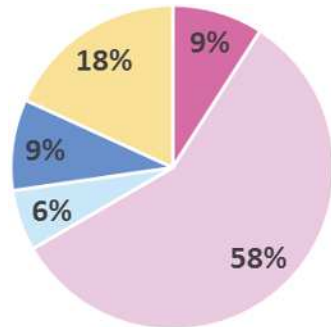
凡例: 多いと思う 適当である 少ないと思う わからない

- 同じ質問について通常級と支援級(いずれも研究校・非研究校の合算)を比較すると、支援級の保護者においては、交流及び共同学習の実施回数が「少ないと思う」と回答している比率が高い傾向にある。

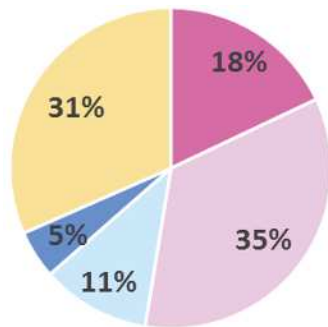
## 5 学校において行われている交流及び共同学習を通じて、子供たちの特別支援教育や障害に対する理解が深まった

### 豊島区

研究校通常級(n:33)

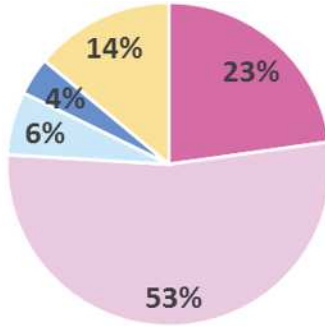


非研究校通常級(n:329)

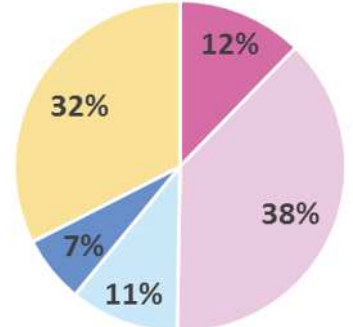


### 日野市

研究校通常級(n:79)



非研究校通常級(n:366)



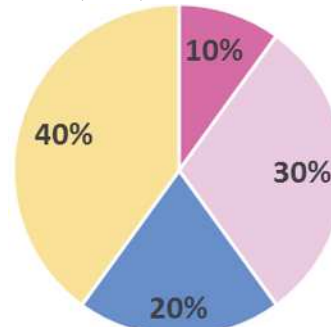
凡例: そう思う どちらかといえばそう思う どちらかといえばそう思わない そう思わない わからない

- 子供が通常級に在籍する保護者から見た、児童・生徒の特別支援教育や障害に対する理解への深度については、研究校の方が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答率が高く、「わからない」と回答する割合も低い傾向にある。

## 6 学校において行われている交流及び共同学習を通じて、学校全体における子供たちの特別支援教育や障害に対する理解が深まった

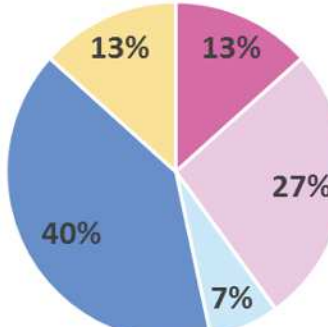
### 豊島区

支援級(n:20)



### 日野市

支援級(n:15)



- 子供が支援級に在籍する保護者(研究校・非研究校の合算)に対し、交流及び共同学習を通じて、学校全体における子供たちの特別支援教育や障害に対する理解が深まったかどうかについて訊ねたところ、通常級の保護者と比較して、肯定的な回答の割合が低い傾向にあった。

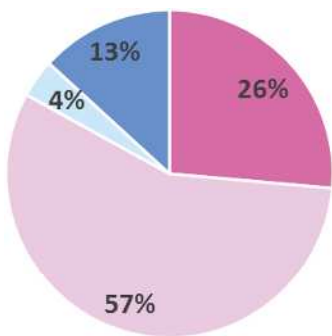
凡例: そう思う どちらかといえばそう思う どちらかといえばそう思わない そう思わない わからない

# 児童・生徒向け調査結果の概要

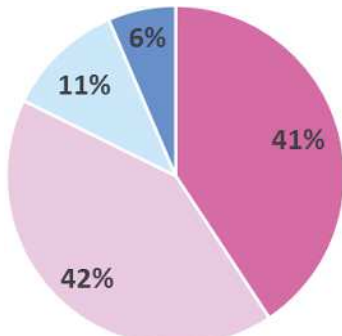
## 1 交流及び共同学習を通じて互いを知ることができたと感じる

### 豊島区

研究校(n:53)

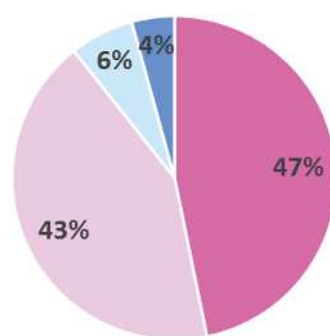


非研究校(n:649)

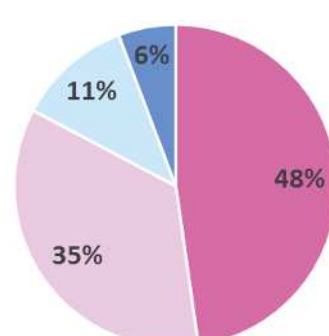


### 日野市

研究校(n:188)



非研究校(n:400)



凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない

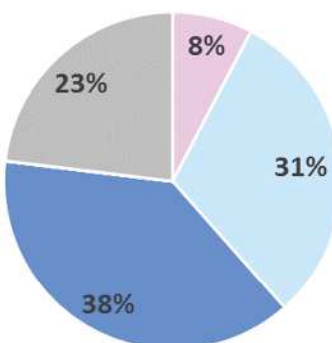
- 交流及び共同学習を通じた相互理解について、豊島区においては、研究校と非研究校のどちらも肯定的な回答が同程度存在している。
- 日野市においては、研究校の方が相互理解をできたと感じている児童・生徒の割合が若干高い。

## 2 通常級と特別支援学校・支援級の児童・生徒と一緒に学習や交流をした中で、印象に残っていること

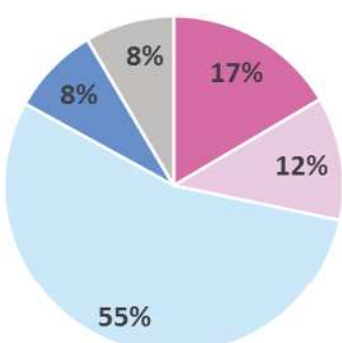
### 豊島区

自由回答を分類集計 ※「楽しかった」等の単なる感想75件を除く。

研究校(n:13)



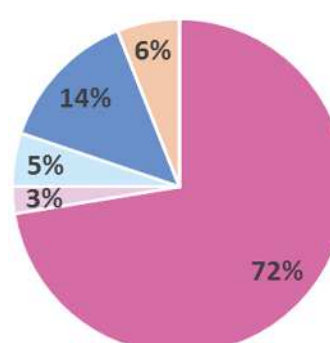
非研究校(n:212)



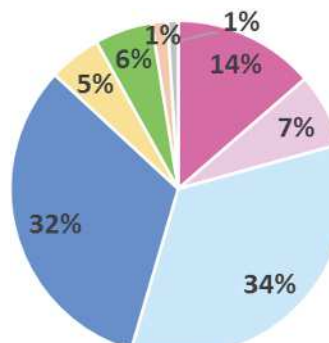
### 日野市

自由回答を分類集計 ※「楽しかった」等の単なる感想121件を除く。

研究校(n:116)



非研究校(n:198)

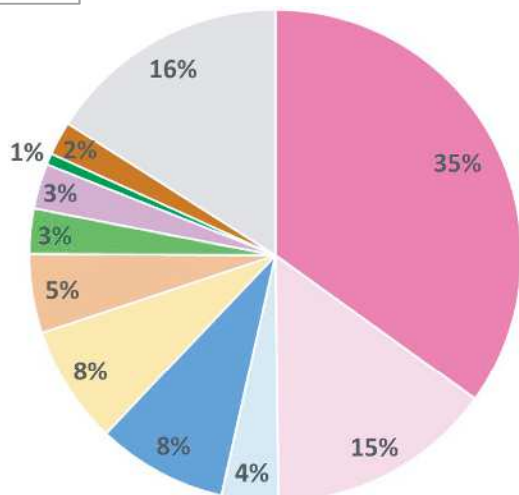


凡例: ■ 交流事業 ■ 共同学習 ■ 学校行事 ■ 移動教室 ■ ポッチャ交流 ■ 交流給食 ■ 学校訪問 ■ その他

- 各校の取組状況によって回答内容にばらつきが見られる。
- 特別支援学校との交流事業を実施している日野市の研究校においては、「交流事業」と「学校訪問」の回答が合わせて約8割となっている。

### 3 交流及び共同学習に対する自由意見

#### 豊島区



- 凡例:
- よい取組だと思う
  - 交流機会を増やしてほしい
  - 交流を継続したい
  - 楽しい
  - 相互理解が深まった
  - 相手への理解が深まった
  - 仲が深まった
  - 仲を深めたい
  - 交流したくない
  - 交流を行う際に課題がある
  - その他

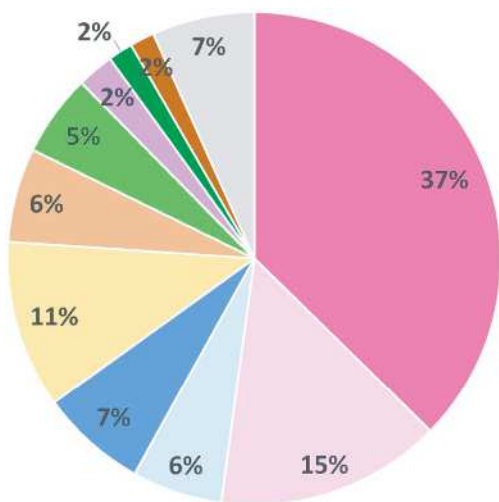
(自由回答を分類集計)

豊島区調査対象校有効回答(n:269)

通常級と支援級の児童・生徒と一緒に学習や交流をすることについて、自由意見として回答された内容を分類集計した。

- 交流及び共同学習について、よい取組だと回答した児童・生徒の割合は35%であった。
- 交流の機会を増やしたり、継続してほしいと回答した割合はあわせて19%であった。
- 交流及び共同学習を通じて、相互理解や相手への理解が深まったと回答した割合は、あわせて13%であった。
- 交流したくない、交流を行う際に課題があるなど、否定的な意見の割合はあわせて3%であった。
- その他の意見としては、「将来様々な人と関わるときに、どのようなコミュニケーションを取れば関係が作れるかが分かるので良いと思う」「普通の授業も一緒に受けてみたい」「今後も様々な場面で一緒に協力をしてみたい」等の意見があった。

#### 日野市



- 凡例:
- よい取組だと思う
  - 交流機会を増やしてほしい
  - 交流を継続したい
  - 楽しい
  - 相互理解が深まった
  - 相手への理解が深まった
  - 仲が深まった
  - 仲を深めたい
  - 交流したくない
  - 交流を行う際に課題がある
  - その他

(自由回答を分類集計)

日野市調査対象校有効回答(n:372)

通常級と特別支援学校や支援級の児童・生徒と一緒に学習や交流をすることについて、自由意見として回答された内容を分類集計した。

- 交流及び共同学習について、よい取組だと回答した児童・生徒の割合は37%であった。
- 交流の機会を増やしたり、継続してほしいと回答した割合はあわせて21%であった。
- 交流及び共同学習を通じて、相互理解や相手への理解が深まったと回答した割合は、あわせて17%であった。
- 交流したくない、交流を行う際に課題があるなど、否定的な意見の割合はあわせて4%であった。
- その他の意見としては、「勉強もいつか一緒にやりたい」「特別支援学校についてもっと知りたい」等の意見があった。

# 実践的研究事業実施地区を対象とした アンケート調査(第2回)の結果

## 調査目的

学校におけるインクルージョンに関する取組について、課題の背景や事業への期待をより精緻に把握し、今後の検討の基礎資料とするため。

## 調査対象・回答状況

地区	区分	対象種別	対象者数	回答者数	回答率
豊島区	研究校	教員	22名 [4名]	22名 [4名]	100% <100%>
		保護者	228名 [20名]	195名 [11名]	86% <55%>
日野市	研究校	教員	61名 [7名]	51名 [5名]	84% <71%>
		保護者	1,000名 [37名]	261名 [10名]	26% <27%>
七生特支	—	教員(小・中学部)	52名 [52名]	50名 [50名]	96% <96%>
		保護者(小・中学部)	114名 [114名]	50名 [50名]	44% <44%>
合計			1,477名 [234名]	629名 [130名]	43% <56%>

※[ ]:支援級担当教員又は支援級在籍者数\* (内数) | < >:支援級担当教員又は支援級在籍者\*における回答率

\*特別支援教室担当教員は支援級担当に含む。通常級に在籍して、特別支援教室の指導も受けている児童・生徒は通常級に含む。

## 調査期間

調査実施期間:令和4年12月6日から12月28日まで  
(インターネットを用いたWEBアンケート方式による回答)

## 回答校

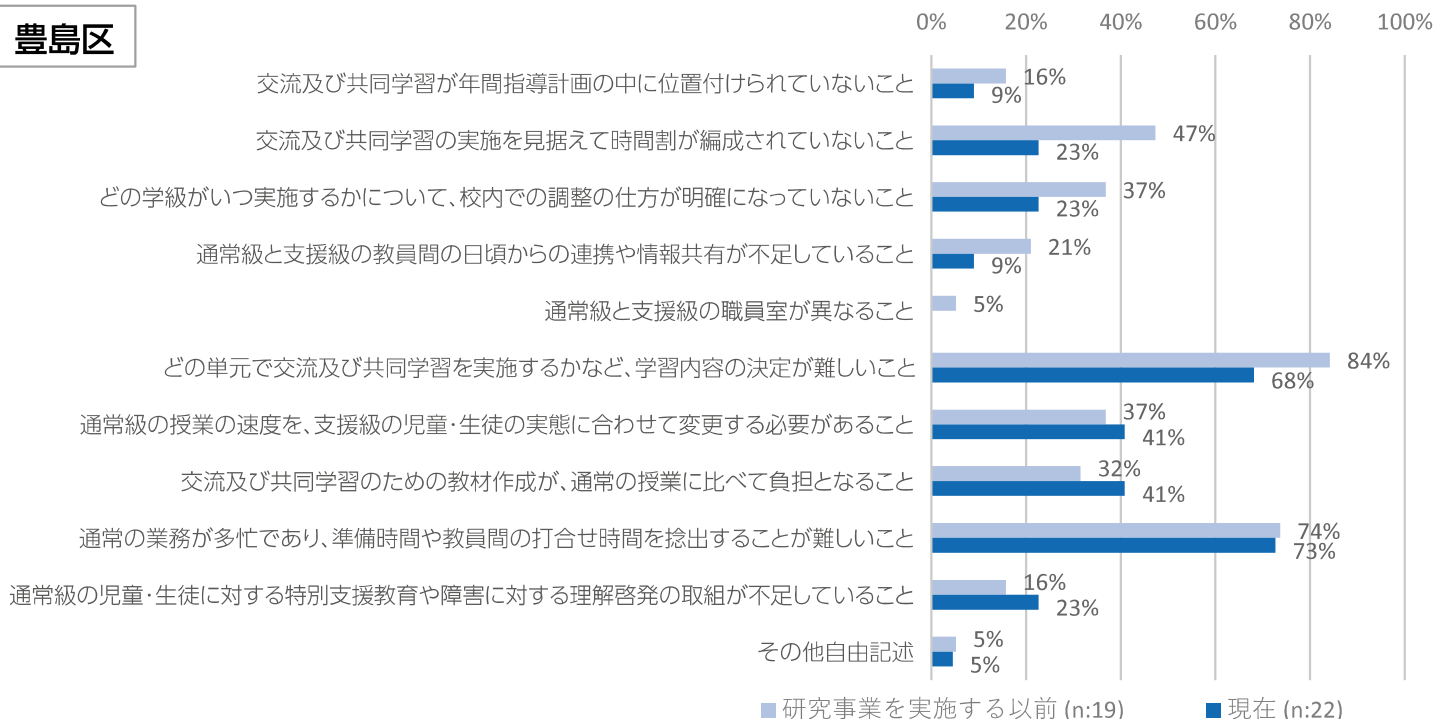
- 豊島区研究校:要小学校
- 日野市研究校:夢が丘小学校、七生緑小学校、日野第三中学校
- 日野市連携校:都立七生特別支援学校

# 教員向け調査結果の概要

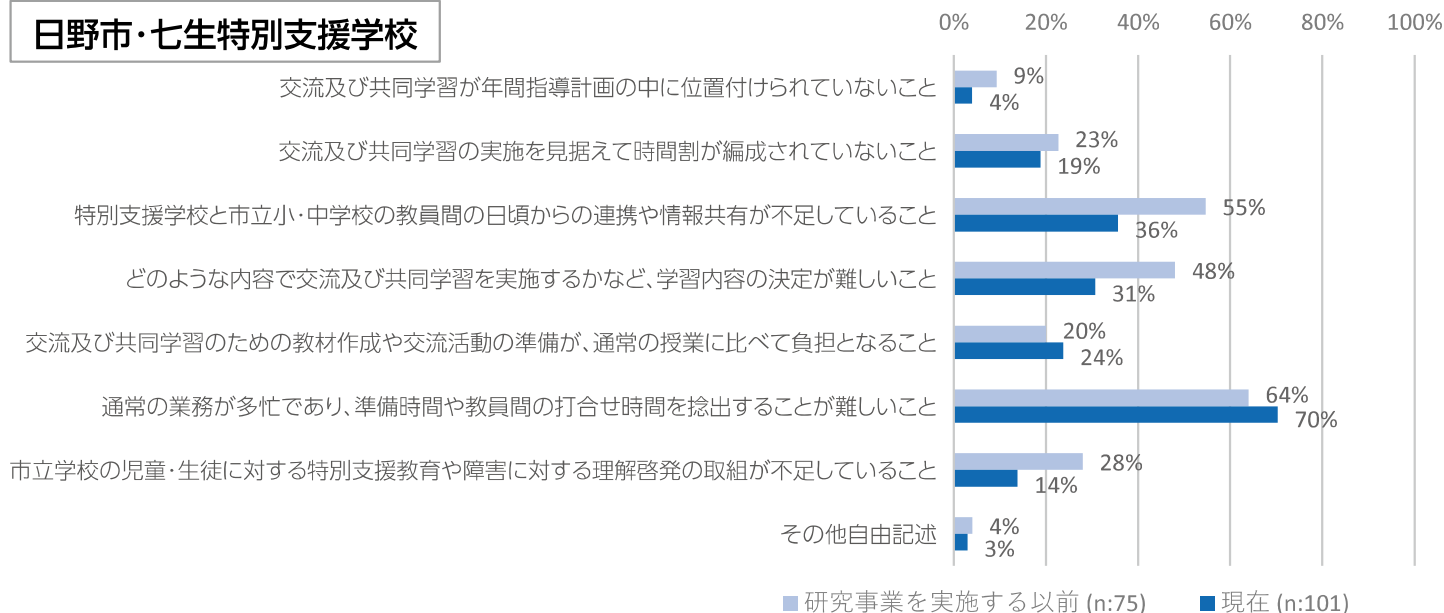
豊島区では同一校内における通常級と支援級の交流及び共同学習、日野市では、特別支援学校と市立小・中学校の交流及び共同学習を主として研究しており、実施環境が異なることから、一部設問の内容が異なる。

## 1 交流及び共同学習実施の準備段階で課題と感じている点について

### 豊島区



### 日野市・七生特別支援学校

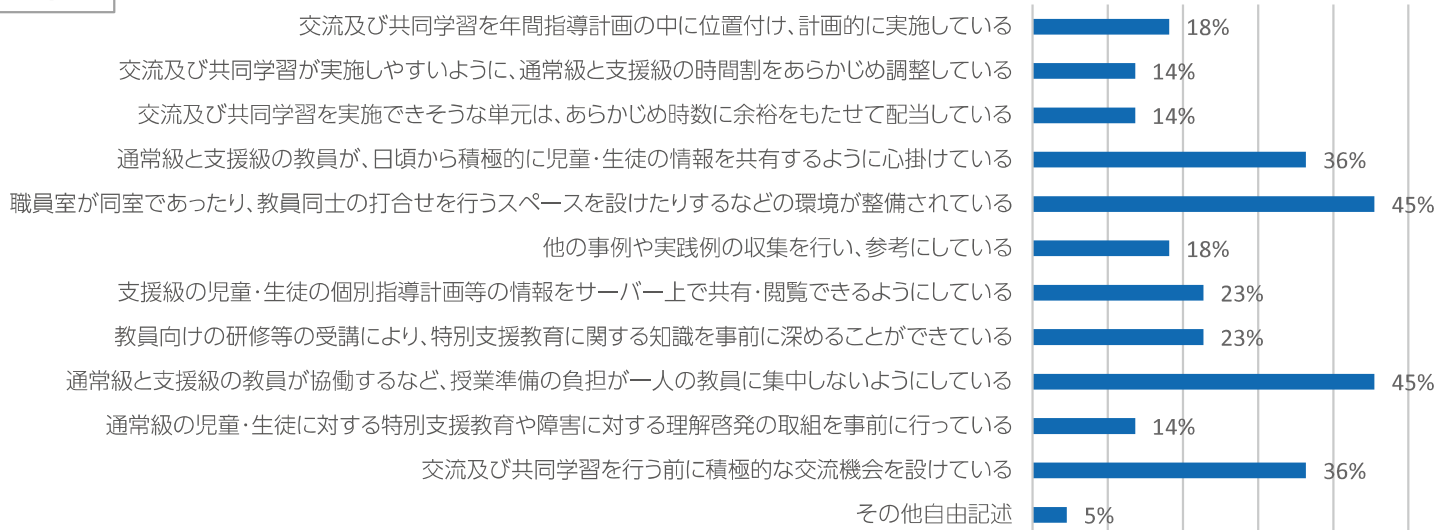


- 令和2年度からの実践的研究事業を実施する以前(前任校を含む。)の時点で課題と感じていたことと、アンケート聴取時点で課題と感じている点について訊ねて比較したところ、指導計画への位置づけ、交流及び共同学習を見据えた時間割の設定、校内調整、教員間の情報共有、実施単元の決定など、事前の計画や準備に関する項目で、現時点の方が課題に感じていると回答した教員が少ない。
- 一方、授業の速度を合わせることや教材作成、交流事業の準備など、授業を実際に進めていく場面に関する項目については、研究実施前よりも現時点の方が、課題に感じていると回答した教員が多い。

## 2 交流及び共同学習実施の準備段階の課題解決に当たり、工夫している点について

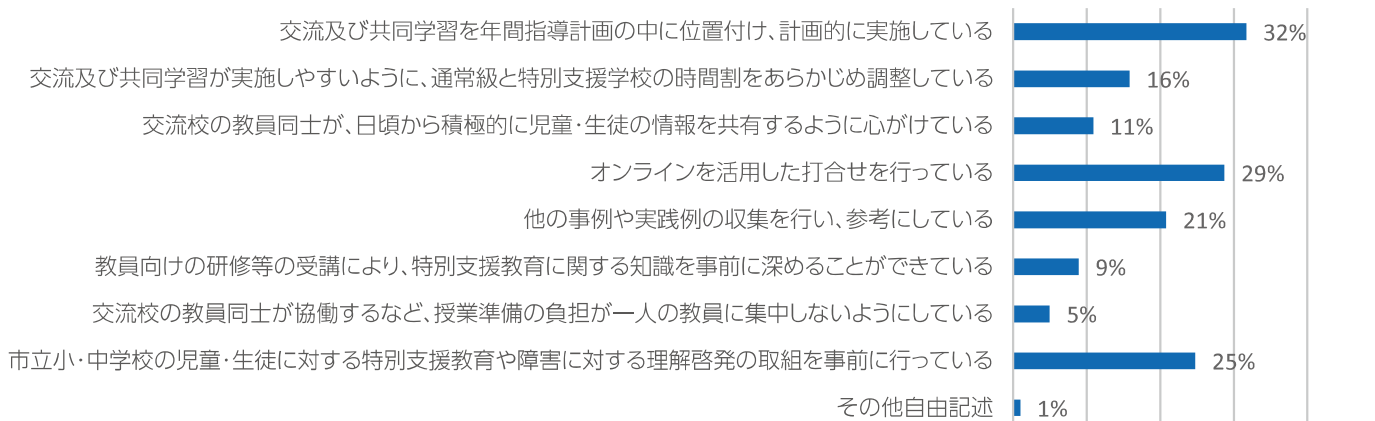
### 豊島区

(n:22) 0% 10% 20% 30% 40% 50%



### 日野市・七生特別支援学校

(n:101) 0% 10% 20% 30% 40% 50%

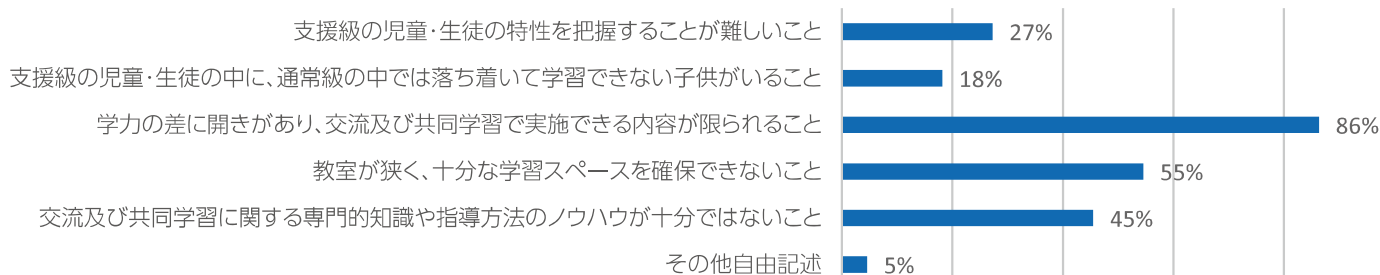


- 豊島区においては、通常級と支援級の教員間における情報共有や打合せを行いやすい環境整備や、協働で授業準備を行うなど、相互協力による課題解決への取組に関する回答が多い。
- 離れた学校間で交流を実施した日野市においては、事前の打合せにおいてオンラインを活用した取組を行っている一方、相互協力に関する事項の回答率は低い傾向にある。

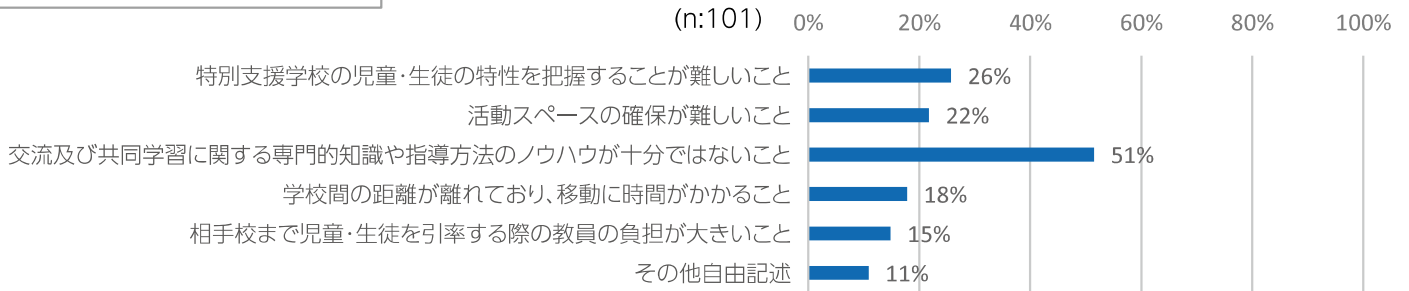
## 3 交流及び共同学習の授業実施に当たって、課題と感じている点について

### 豊島区

(n:22) 0% 20% 40% 60% 80% 100%



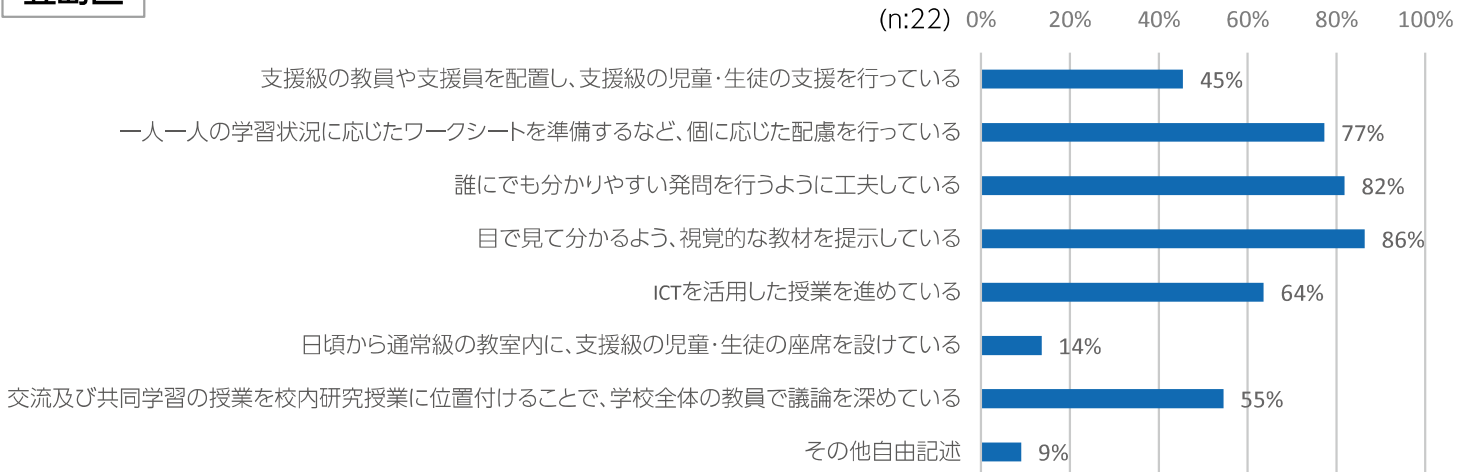
## 日野市・七生特別支援学校



- 同一校内における通常級と支援級での教科における交流及び共同学習を主に実施している豊島区においては、学力差の開きにより、交流及び共同学習の実施内容が限られることを課題と感じている教員が8割を超える。
- 豊島区・日野市ともに、約半数の教員が、交流及び共同学習に関する専門的知識や指導方法のノウハウが十分ではないことを課題として回答している。
- 日野市における「その他」の回答としては、「感染症対策で交流内容が制限される」等の回答があった。

## 4 交流及び共同学習の授業実施に当たって、工夫している点について

### 豊島区



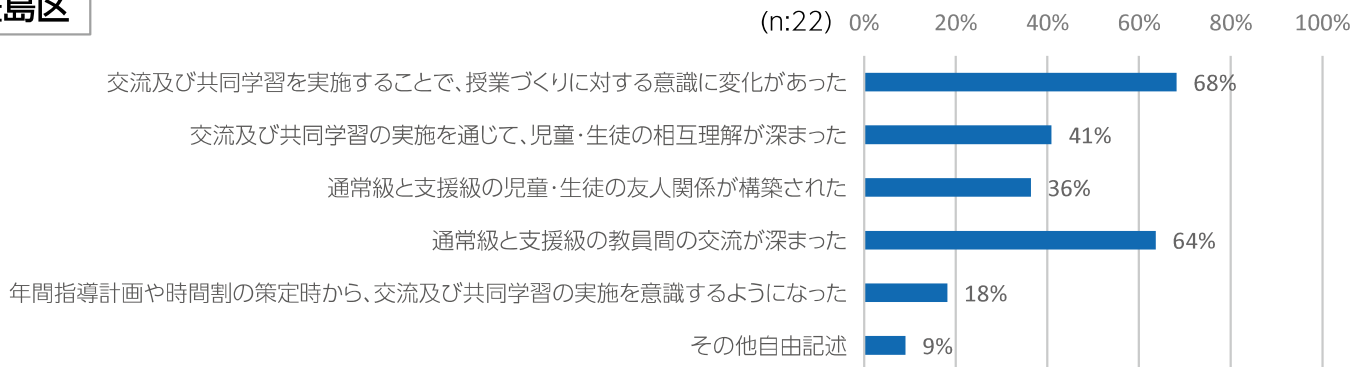
## 日野市・七生特別支援学校

日野市及び七生特別支援学校においては、交流及び共同学習の授業実施に当たって工夫している点について、自由記述での回答形式で調査を行った。以下は主な回答の抜粋である。

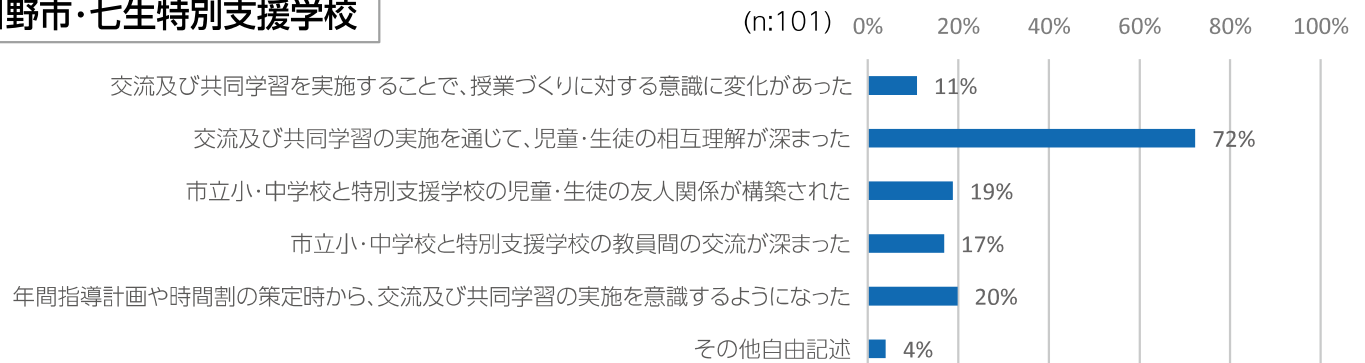
- 教員主体ではなく、児童が中心となって活動を進めることができるように計画している。
  - 打合せを密に行い、充実した活動ができるようにしている。
  - 新型コロナウイルス感染症の影響で、予定していた直接交流の活動が急に不可能になった場合でも、オンラインでの交流に切り替えられるように内容を考えている。
  - 学習指導要領との関係性を明確にして実施に当たっている。
  - 早めに内容を検討し、書類の作成に取り組むようにしている。
  - 事前学習を行い、当日スムーズに交流に参加できるようにしている。
  - 児童・生徒も教員も負担にならないような授業づくりを心掛けている。
  - 特別支援学校の児童・生徒は、事前学習を少しずつ行うことで、当日にむけて見通しをもって活動できるようにしている。
- 豊島区においては、個に応じたワークシートの準備や誰にでも分かりやすい発問、視覚的な教材の提示など、ユニバーサルデザインを意識した授業づくりに取り組んだ結果が表れている。
  - 日野市においては、特別支援学校の児童・生徒が、落ち着いて、見通しをもって活動できるよう、事前学習をしっかりと行った上で、交流及び共同学習を実施している。

## 5 交流及び共同学習を実施してよかったと感じる点について

### 豊島区



### 日野市・七生特別支援学校



- 同一校内における通常級と支援級での交流及び共同学習を主に実施している豊島区においては、授業づくりに対する意識変化や教員間の交流の深化など、教員に関する事項に関する回答が高い傾向にあった。
- 特別支援学校と市立小・中学校における交流事業を主に実施している日野市においては、児童・生徒の相互理解の深化に関する回答が、高い傾向にあった。

## 6 交流及び共同学習を通じて、ご自身の学級の児童・生徒が、どのようなことを学んだと捉えているか

### 豊島区

- 一人一人の個性が異なる中で、協調性をもって学習をすること。
- 分け隔てない声掛けを見ると、交流を通して、関係の深まりや共同する際の仲間意識を学んだのではないかと感じる。
- 自分が当たり前に行っていることは、もしかしたら他の人にとっては難しいと感じるものがあるということ、交流を通して学んだのではないかと感じた。また、そういった場面に直面したときには、手を差し伸べる優しさや思いやりのある言葉が必要であることも、交流を通して学んだのではないかと考える。
- クラスは違うが、同じ学年の友達として、関わるできるようになった。

### 日野市

- 相手のことを考えて行動できる場面が見られたこと。
- 自分が住む地域への理解が深まったり、視野が広がったりした。
- 交流することにより、「知らない子」という垣根が取り払われ、同じ地域で学び、生活する友達という意識が徐々に芽生えてきた。

### 七生特別支援学校

- 発表する場ができ、自己肯定感を得る場になっている。
- 普段学校で取り組んでいることを、他校の児童・生徒に披露したり、一緒に取り組んだりすることで、自信をもつことができた。
- いつもと違う時間割や大勢の人の中であっても、交流に参加することができ、いつもと違うけれど頑張るということを学べたと思う。



## 7 教科における交流及び共同学習の具体的な取組事例について

豊島区立要小学校での教科における交流及び共同学習の具体的な教科・単元について、9～13ページで紹介した事例以外の取組について、アンケートから回答のあったものを以下で紹介する。

教科	学年	単元等	交流及び共同学習の時数等
国語	2年	〇〇(各季節)がいっぱい	全2時間
		うれしいことば	全2時間
	5年	秋のくらし(俳句づくり)	1時間
		冬の朝	3時間目
社会	4年	特色ある地域の人々	8時間中5時間(導入・展開・まとめ)
理科	3年	音をつたえよう	5時間中4時間(まとめ以外)
体育		表現	

## 8 交流及び共同学習を実施してみたの感想

### 豊島区

- 子供たちが学習場面以外の生活場面でも、自然に相手を受け入れ交流することができるようになった。
- 様々な児童に対応することで、ユニバーサルデザインや発問を今まで以上に意識した。その分、教材準備や打合せ等が大変であった。
- 学年があがるにつれて、教科が限られてしまうところが難しいところである。
- 視覚的支援や個別のワークシートの活用など、支援の仕方の幅が広がった。
- 目標や時間数、教材等の準備に大きな配慮が必要だが、「わかる・できる」授業の実践は、授業の質の向上、児童の意欲、教員の指導力の向上につながる。

### 日野市

- 近隣の小・中学校と関わるのが少ない中、関わることができ、相手意識をもって授業を実施できることに意義を感じた。
- 発達段階に応じて、定期的に交流及び共同学習を行うことが大切であることを学んだ。
- コロナが収まってきたら対面での活動を希望する。
- 教員自身が「これからの共生社会を担う子供たちを育てている」という当事者意識をもち、交流及び共同学習の在り方について学ぶ機会が必要だと感じる。
- もう少し頻度を増やした方が、より理解が深まり充実した交流が行えると思う。
- それぞれの学校のカリキュラムがあり、足並みを揃えるのは難しいと感じた。

### 七生特別支援学校

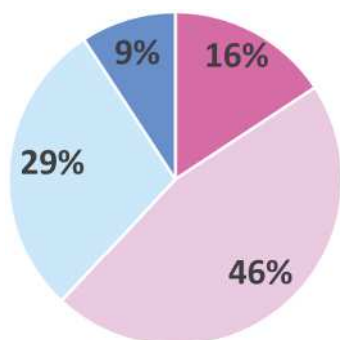
- 教員間の打合せや、事前学習が大切であると感じる。
- オンライン交流と対面での交流の両方ができてよかった。
- 特別支援学校の児童は、障害が軽度の児童も重度の児童にも、事前学習の積み重ねにより当日落ち着いて、見通しをもって活動できるようになるため、事前学習がとても大事である。
- 中学校との交流では、教育課程の問題などもあり、どうしても特別支援学校主体になってしまい、負担感が否めない。両校が交互に主体となる形で進めていけるとよい。
- 子供たちが出会い、一緒に同じ時間と場所、楽しい活動を共有し、知り合えた、その経験が、地域の中でつながっていくきっかけになったと感じた。

# 保護者向け調査結果の概要

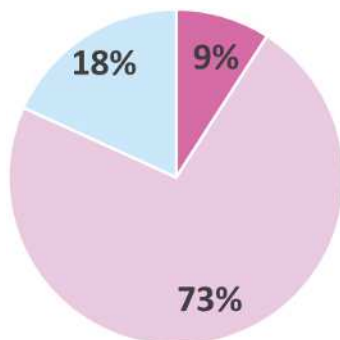
## 1 交流及び共同学習の取組について、学校から行われる情報発信は十分であるか

### 豊島区

通常級(n:184)

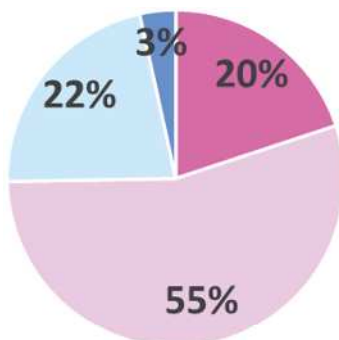


支援級(n:11)

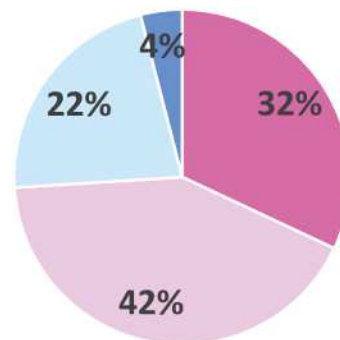


### 日野市・七生特別特支学校

市立小・中学校(n:261)



都立七生特別支援学校(n:50)

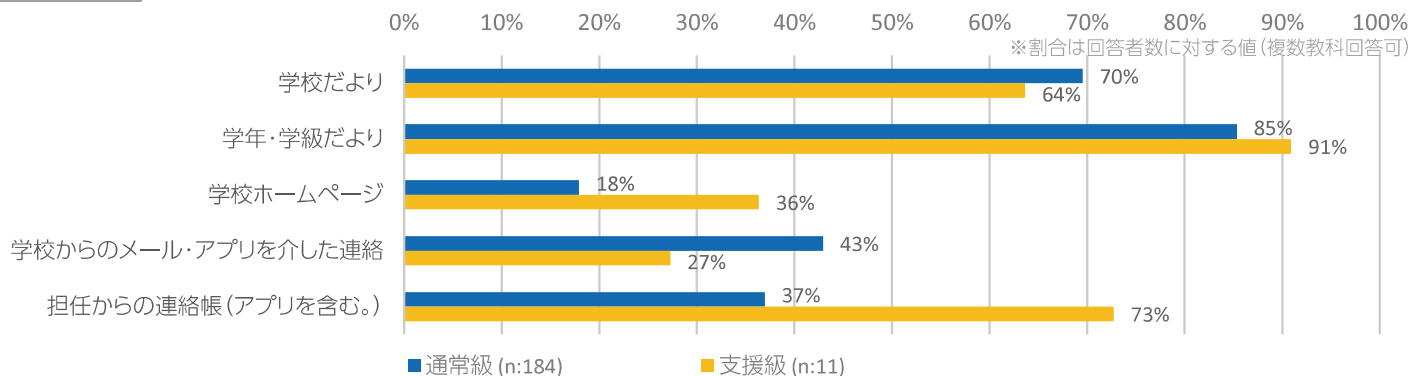


凡例: ■ そう思う ■ どちらかといえばそう思う ■ どちらかといえばそう思わない ■ そう思わない

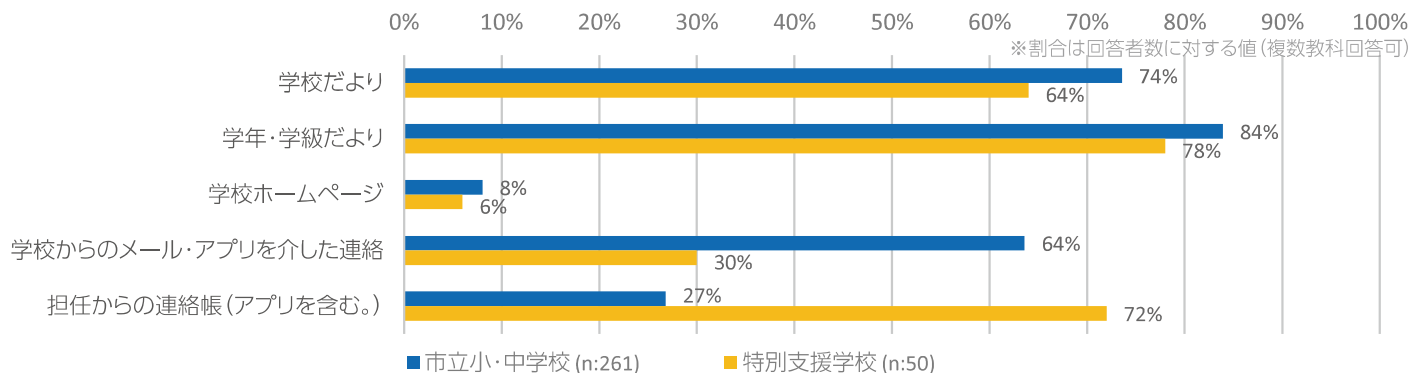
- 豊島区においては、通常級の保護者で情報発信が十分ではないと感じている割合が高い。
- 日野市立小・中学校と都立七生特別支援学校においては、肯定的な回答が同程度だった。

## 2 学校からの情報発信において、特によく目を通すもの

### 豊島区



### 日野市・七生特別支援学校

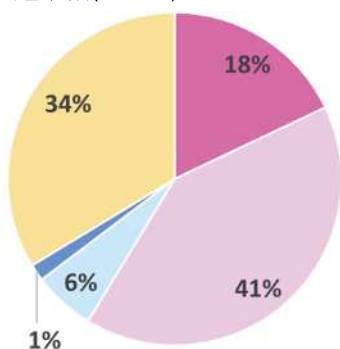


- 学校・学年・学級だよりは広く読まれているが、学校ホームページを閲覧する割合は低い傾向にある。
- 支援級や特別支援学校においては、担任からの連絡帳(アプリを含む。)

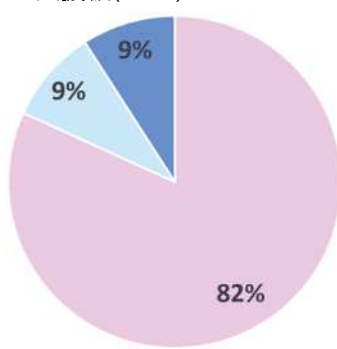
### 3 学校で行われている交流及び共同学習の取組内容について満足しているか

#### 豊島区

通常級(n:184)

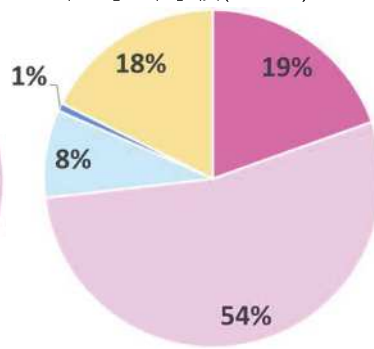


支援級(n:11)

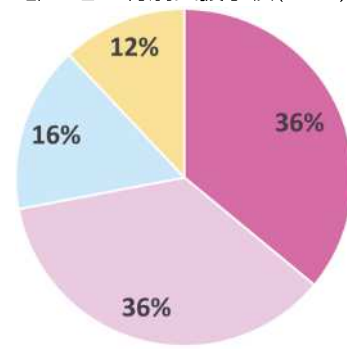


#### 日野市・七生特別支援学校

市立小・中学校(n:261)



都立七生特別支援学校(n:50)



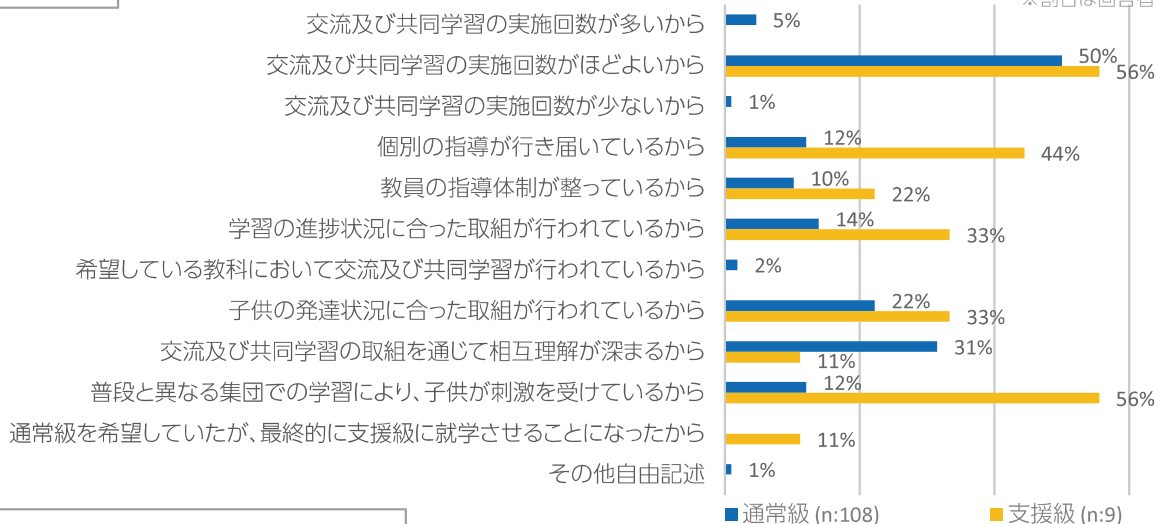
凡例: ■ 満足している ■ どちらかといえば満足している ■ どちらかといえば満足していない ■ 満足していない ■ 交流及び共同学習の取組状況について把握していない

- 交流及び共同学習の取組内容の満足度は、支援級や特別支援学校の方が否定的な回答が多い傾向にある。
- 豊島区の支援級を除いては、交流及び共同学習の取組状況について把握していないと回答した保護者が一定数存在している。

### 4 3の質問で「満足している」又は「どちらかといえば満足している」と回答した場合の理由

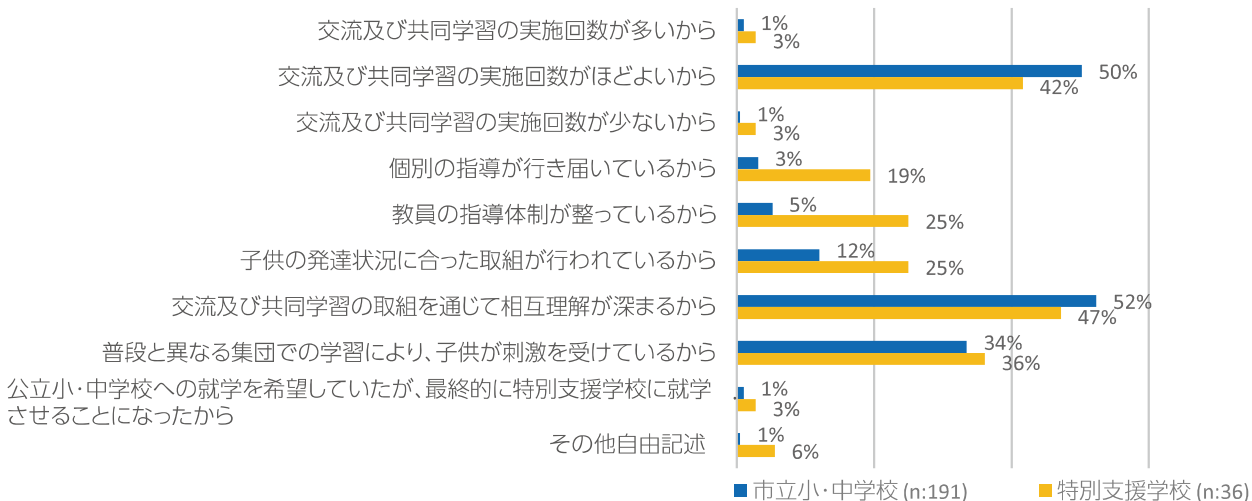
#### 豊島区

0% 20% 40% 60% 80% 100% ※割合は回答者数に対する値(複数教科回答可)



#### 日野市・七生特別支援学校

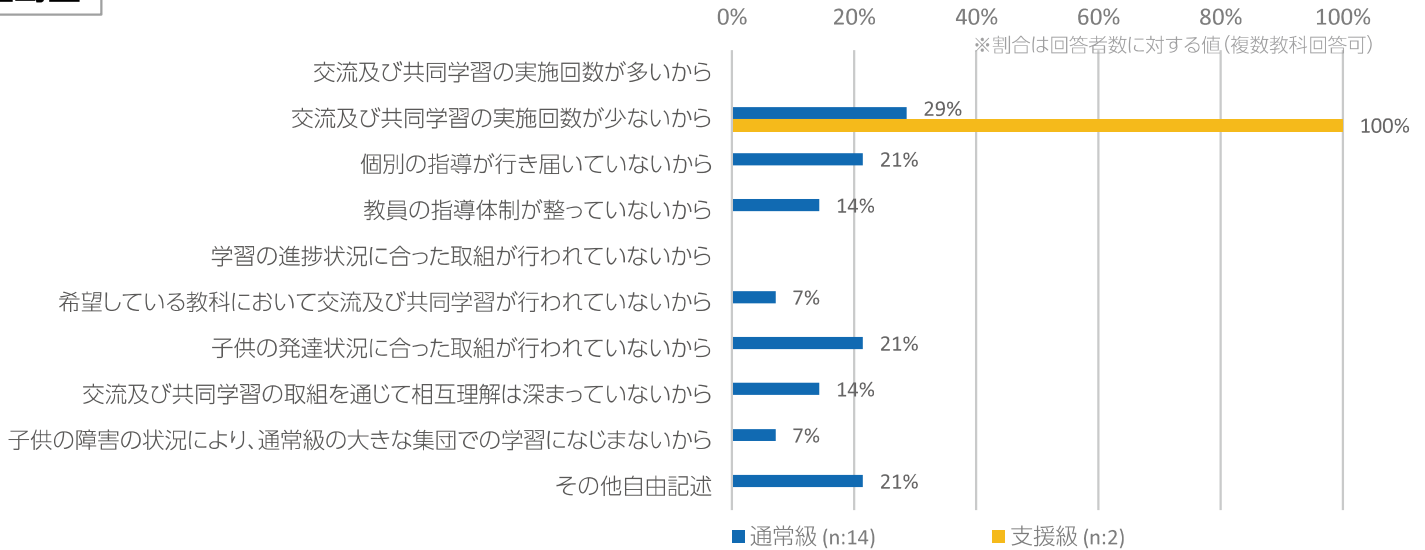
0% 20% 40% 60% 80% 100%



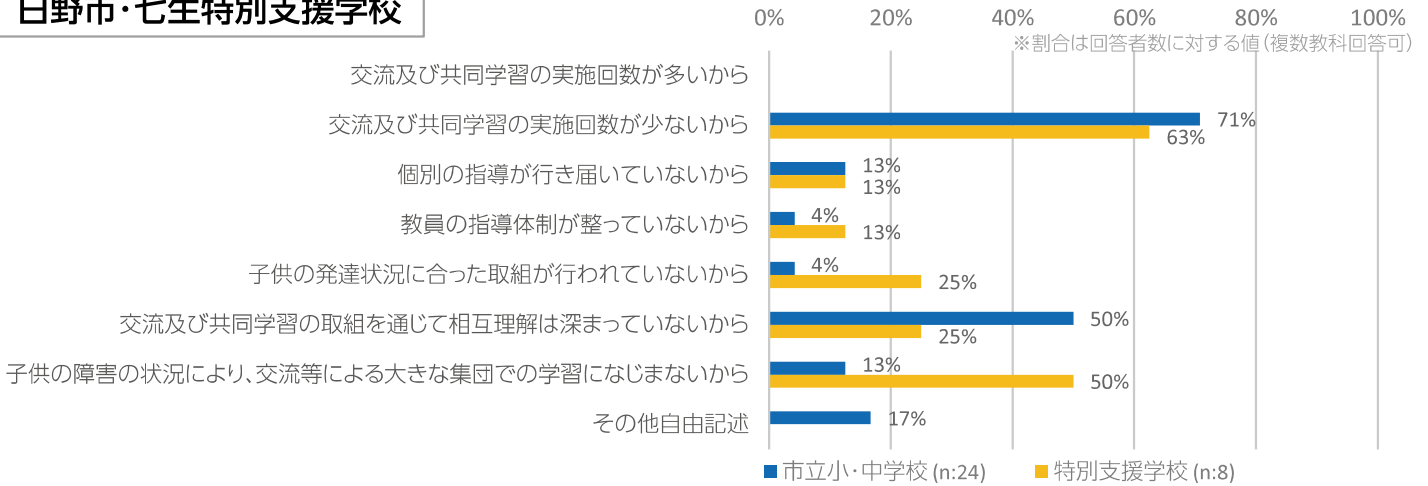
- 交流及び共同学習の実施回数は、学級を問わず、約半数の保護者がほどよいと感じている。
- 共同学習を主とする豊島区で満足度の高い保護者は、通常級は「相互理解が深まる」、支援級は「刺激を受ける」を理由としている割合が高く、交流活動を主とする日野市で満足度の高い保護者は、通常級・支援級ともに「相互理解が深まる」「刺激を受ける」を理由としている割合が高い。

## 5 3の質問で「どちらかといえば満足していない」又は「満足していない」と回答した場合の理由

### 豊島区



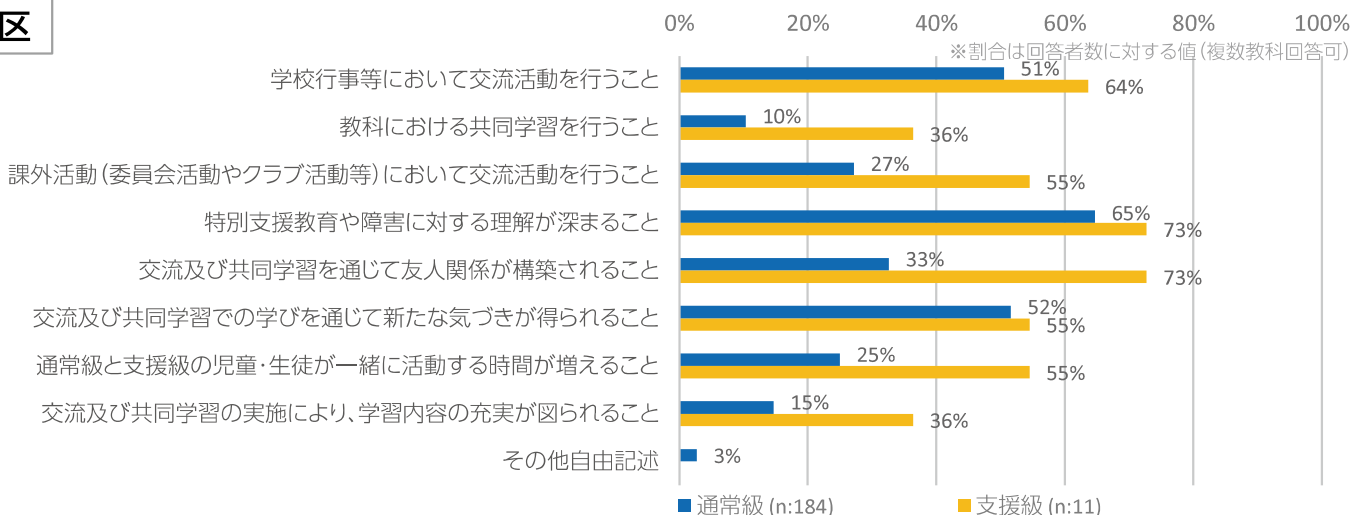
### 日野市・七生特別支援学校



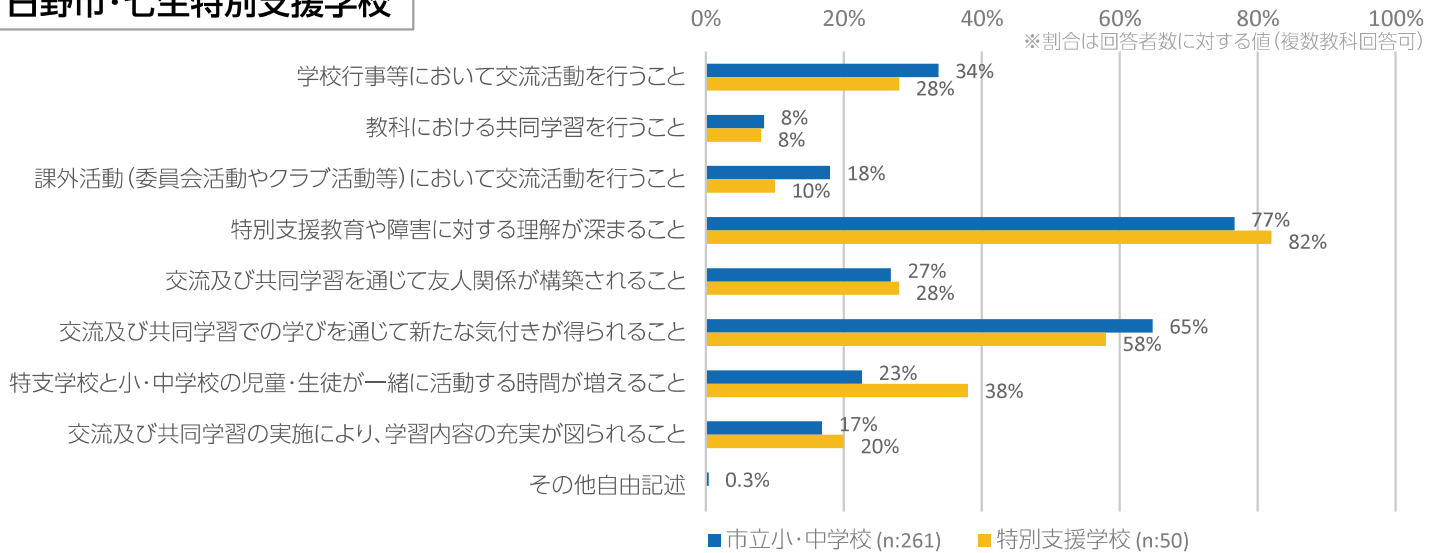
- 交流及び共同学習への満足度の低い層では、交流及び共同学習の実施回数が少ないと感じている割合が高い傾向にある。
- 特別支援学校における満足度の低い層では、大きな集団での学習になじまないと感じている保護者が半数存在する。

## 6 交流及び共同学習に期待すること

### 豊島区



## 日野市・七生特別支援学校



- 特別支援教育や障害に対する理解が深まることや、交流及び共同学習での学びを通じて新たな気づきが得られることについては、両区市ともに回答の割合が高い。
- 豊島区の支援級の保護者においては、通常級の保護者と比較して、友人関係が構築されることや、一緒に活動する時間が増えることに対する期待が高い傾向にある。

## 7 交流及び共同学習に関する感想など(自由意見)

### 通常級の保護者

- 低学年のうちには日常的に一緒に受ける授業があってもよいと思う。
- 支援級の教室が、通常級の間であって、自由に行き来ができるとよいと思う。
- 子供が低学年のため、交流及び共同学習の内容を聞いてもイメージができなかったため、学校だより等で学年ごとに交流内容を詳しく掲載してもらえるとありがたい。
- 交流及び共同学習の取組をホームページに掲載する際に、相手校の掲載内容をリンクするなどの工夫をすると、相互により良い情報発信になると思う。
- 子供が交流及び共同学習を通じて、特別支援学校の先生という職業に興味をもつことになったので、直接の交流や学校見学等には、将来のきっかけとなる可能性が含まれていることを実感した。
- 色々な人との交流によって刺激を受けることで、固定観念にとらわれない柔軟な子供に育つ良い機会だと思う。

### 支援級の保護者

- 支援級に入った時は、交流及び共同学習の時間がたくさんあってほしいと思っていたが、実際に通ってみると、子供にあった指導をしてもらっており、交流及び共同学習にこだわることはなくなった。交流及び共同学習は、子供が望んだり、自信をもっている授業等に参加できれば十分だと感じている。

### 特別支援学校の保護者

- できるだけ先入観のない早い時期に、たくさん交流ができるとよい。
- 特別支援学校と関わりをもつ学校がもっと増えたらよいと思う。
- 我が子の場合は、交流となるとハードルが高いため、一人一人の状況に応じて場を設定してもらいたい。

# 事業総括

## 実践的研究事業の事例から明らかになったポイント

- 交流及び共同学習に係る計画を策定し、実施に向けた校内での調整の仕方を明確にすること
- 交流及び共同学習を年間指導計画に位置付け、交流学級同士の時間割調整を事前に行うなど、計画的に実施すること
- 事前学習を実施することで交流や学習の見通しを立て、スムーズに交流及び共同学習に参加できるようにすること
- 児童・生徒が主体的に交流及び共同学習の内容を考え、実施しようとする姿が見られること

## アンケート調査結果のポイントと今後の方向性

### 調査結果

- 交流及び共同学習を通じて、通常の学級、特別支援学級、特別支援学校いずれの児童・生徒においても、相互理解が深まったなど、一定の成果が現れている。
- 特別支援学級との交流及び共同学習は、学校行事等の特別活動が多く、教科での取組は、体育や総合的な学習の時間等に限定されている。特に中学校の教科学習での実施が少ない。※
- 研究に参加した教員の8割以上が、交流及び共同学習の実施内容が限られることを課題と感じている。  
※第3章・63ページ参照
- 研究に参加した教員の約半数が、交流及び共同学習に関する専門的知識やノウハウの不足を課題と感じている。
- 共同学習を主とする豊島区で満足度の高い保護者は、通常級は「相互理解が深まる」、支援級は「刺激を受ける」を理由としており、交流活動を主とする日野市で満足度の高い保護者は、通常級・支援級ともに「相互理解が深まる」「刺激を受ける」を理由としている。
- 教員アンケートにおいては、共同学習を主とした豊島区に比べ、交流活動を主とした日野市の方が、児童・生徒の相互理解がより深まったという回答が多い。
- 満足度の低い保護者は、実施回数が少ないことを理由にあげており、特別支援学校には、集団での学習になじまないことを理由に挙げる保護者も存在している。

### 考えられる今後の方向性

- ◆ 教科の単元の一部(導入部分、実験、実地調査など)について、指導案やワークシートの工夫により、交流及び共同学習を実施することが可能
- ◆ その際、個別指導計画(個別の指導計画)に基づいて、個に応じた計画を立てることが重要
- ◆ 中学校における交流及び共同学習の実践を更に進めることが必要
- ◆ 専門家を招聘した管理職・教員向け研修の実施により、教員の専門性を向上
- ◆ 教科や単元等の目標を達成できる事例を収集し、事例を共有
- ◆ 「交流」の側面と「共同学習」の側面の二つの側面のどちらも並行して推進していくことが必要
- ◆ 児童・生徒の障害の状況や保護者の意向を踏まえた上で、個別のニーズに合わせた対応が必要

### 今後の取組

- これまでの研究成果を踏まえながら、交流及び共同学習の実施が拡充されるよう、交流及び共同学習を計画的に実施していく区市町村を支援していく。
- 各区市町において実施する交流及び共同学習の事例を集約し、その教育手法を広く普及していく。